

何が変わっているのか

香川県中学校教育研究会情報教育研究部会長 田中俊彦

ワープロ党も多いはずだが、今は、ワープロ党諸氏の机上にパソコンが鎮座しているに違いない。パソコンに向き合う悩める中高年の背中が寂しくみえるのをご存じだろうか。この寂しいというのは哀れを誘うという意味ではない。頭を悩めているのはワープロがもう生産されなくなりパソコンに吸収されてしまったからである。愛する「わがワープロ」が姿を消してしまったから寂しいのである。こんなワープロ党の想いを知らずして、若者たちは軽やかなキータッチでパソコンから情報を意欲的に生産している。カラフルな字や表や絵が量産されている。卓袱台に置かれた「温く温くのご飯にそえる旨そうな秋刀魚」が「美味そうな豪華な料理」に変わったような気分がしてならない。そして毎日、美味そうな豪華な料理を食べ続けるとどうなるのかが心配になっている。

IT革命とやらを身近に実感し、何もかもが変わってきた、否、変わっているような錯覚に陥っている。パソコンを自由に扱えない教師は「だめ教師」のレッテルを張られる時代になってきた。これからこうした「だめ教師」は時間（とき）の経緯と共に減少していくであろうが、パソコンを巧みに駆使して授業をする教師が「よい教師」とはいえない。「だめ」と「よい」とは教師にとってさほど重要なファクターにはならない。重要なことは尊敬される「師」としてのプロ教師になることである。こうした教師はどんな時代になろうが、何が変わろうが、子ども的人格形成に深くかかわっていくのである。そしてコンピュータ等の情報機器などを tool（道具）として扱えられるのである。

ところで tool には3つの成立条件が必要である。1)人間の手足(身体)の延長として、2)自由に操作(マニピュレーター)でき、3)生存価値がある、というものである。こうしたことから今のコンピュータを考えると、人間にとって tool として機能させるには十分といい難く、そのうえ「厄介さ」が残っている。まだまだ快適な tool にほど遠いものであるといえる。だから今のコンピュータは必然的に変わるのである。超薄型化、超小型化し、身体の一部により近づくようになる。即ち、「どこにでもある」コンピュータ時代が予約されているともいえる。今流行りの新語でいえば、「ユビキタス・コンピュータ」時代を想定すればよいのである。こうなると厄介さや煩わしさがなくなり、ごく自然に私たちの身体の一部として価値をもって機能するようになるのである。こうした時代は夢ではない。変わるべくして変わってくるのである。

教育に携わる者にとって、拘(こだわ)りをもつこともよいだろうし、ノスタルジーに浸ることもときには大切であろう。だが、情報化時代という得体のしれない怪物がよき教育をつくるわけではない。よき教育がよき情報化時代を形成するのである。

